

保存

昭和52年度秋季特別展
10月1日～10月31日
(期間中無休)

百年祭記念

中根雪江先生展

1
/



中根雪江肖像写真（慶応二年正月 六十歳の像）
事しあらはみは老ぬとも御先にと 思ふ心の写しゑそこれ

君か代はと
かへりを
また幾か
へり
みとりの
まつと
共にさ
かえむ
師質

君か代はと
かへりを
また幾か
へり

みとりの
まつと
共にさ
かえむ
師質

中根雪江略年譜

年次	西歴	年令	事蹟
文化 天保 元	一八〇七 一八三〇	一 二四	◎7月1日 雪江、福井藩士中根衆譜・三木の嫡男として福井に誕生。 ◎10月25日 雪江、家督相続す。(寄合引渡の席、高七百石)
二	一八三一	二五	◎2月27日 雪江、側用人見習(十四代藩主齊承時代)に就任。
三	一八三二	二六	◎3月28日 通称を栄太郎から鞆負 <small>ゆきえ</small> と改む。
六	一八三五	二九	◎2月 雪江、学塾掛に就任。 ◎4月16日 雪江、御用人御奏者番兼に就任。
九	一八三八	三二	◎4月6日 雪江、御書院番頭に就任。 ◎5月10日 江戸の国学者平田篤胤に入門。 ◎8月24日 十五代藩主齊善歿す。 ◎10月2日 春嶽(田安齊匡八男。慶永)十六代藩主を継ぐ。 ◎10月5日 雪江、春嶽の家督並びに御引移御用掛拝命。
一〇	一八三九	三三	◎この年、福井藩、第一次儉政行う。以後、五次(安政元)にわたり儉政断行。
一二	一八四一	三五	◎5月 雪江、弊政改革の要点を八ヶ条にまとめた建言書を春嶽に呈す。
一四	一八四三	三七	◎3月11日 御用人その俸、御勝手掛りに就任。 ◎6月11日 春嶽、福井に初入国。 ◎8月17日 雪江、御勝手掛はその俸、藩札整理の命を受く。
弘化 三	一八四六	四〇	◎6月4日 雪江、大御番頭に就任。 ◎7月9日 雪江、側用人見習に就任。
四	一八四七	四一	◎3月7日 雪江、側用人本役に就任。 ◎3月 福井藩、洋式砲術の導入を開始。
嘉永 二	一八四九	四三	◎11月25日 藩医笠原白翁、雪江の支援により福井で初めて牛痘種痘開始。
三	一八五〇	四四	◎9月2日 雪江、海岸御備御用掛に就任。 ◎12月 福井藩、御家流砲術を制定。

嘉永	五一八五二	四六	○8月 福井藩、軍制改革を実施。(第一回)雪江、御用掛として参画。
	六一八五三	四七	○6月3日 ペリー、浦賀に来航。
安政	元一八五四	四八	○1月14日 ペリー再到来。○2月11日 異国船渡来につき雪江、藤田東湖に初めて対面論談。○3月3日 日米和親条約締結。
	三一八五六	五〇	○10月 この頃より藩論、開国論に一定。
	五一八五八	五二	○1月27日 橋本左内、春嶽より將軍継嗣問題・条約勅許問題等の解決に尽力すべき命を受け上京。これより雪江と共に縦横の活躍をする。○2~6月 この間、雪江、將軍継嗣問題につき、一橋臣平岡圓四郎・水戸藩士安島彌次郎・茅根伊豫介らと協力、盛んに奔走。○4月23日 井伊直弼、大老に就任。○6月19日 井伊大老、日米修好通商条約に調印。○6月24日 春嶽、井伊大老を訪い論難、さらに不時登城。○6月25日 紀伊慶福(家茂)、將軍継嗣に決定。○7月5日 春嶽、隠居急度慎を命ぜらる。○同日 糸魚川藩主松平直廉(茂昭)、福井藩主となる。○9月7日 安政の大獄始まる。○10月22日 橋本左内検査さる。
萬延	六一八五九	五三	○11月7日 雪江「昨夢紀事」の執筆を開始。
	元一八六〇	五四	○3月3日 井伊直弼暗殺さる。(桜田門外の変) ○6月21日 雪江「昨夢紀事」の執筆完了。
文久	二一八六二	五六	○2月11日 皇女和宮、將軍家茂に降嫁。○4月25日 春嶽、謹慎を解かる。 ○五月~六月 この頃、雪江、春嶽の主張と閣老の意向との食違を調整のため、盛んに大久保忠寛(一翁)らに面接協議す。○7月 横井小楠、春嶽の顧問として幕政改革に参画。これより雪江と協力して活動。○7月9日 春嶽政事総裁職に就任。○7月 雪江、將軍上洛について幕閣・有司の説得に活躍。

文久 三	一八六三	五七	<ul style="list-style-type: none"> ○8月21日 生麦事件。 ○9月 この頃、長州藩士桂小五郎ら、攘夷運動を主唱して度々雪江に面談を求め、討議を重ねる。 ○1月 雪江、初めて上京し、薩摩の大久保利通と緊密な連絡をとりつつ公武合体のため奔走。 ○2月4日 春嶽入京(第一回)し、政令帰一を主張。 ○3月5日 春嶽、上洛した将軍家茂に大政奉還を勧告し、自らも総裁職を辞せんとす。 ○6月14日 雪江、藩論分裂の責を負い、蟄居・隠居を命ぜらる。 ○この頃雪江、尚友書屋にて「再夢紀事」を執筆。 ○6月18日 京都における公武合体派勢力、長州等過激尊攘派の駆逐に成功。(八・一八政変) ○11月9日 雪江、蟄居を解免され上京。 ○11月12日 雪江、八・一八政変後の時局解決のため活動を開始する。 ○12月26日 この頃より、雪江、薩摩藩と連絡をとりつつ、連日のごとく慶喜と中川宮との間を往復し、公武間の周旋につとめる。 ○2月15日 春嶽、京都守護職となる。 ○3月 雪江、春嶽の「政体一新」の持論実現のため幕閣・有司の説得に奔走。 ○5月8日 雪江、御側御用人隠居を命ぜらる。通称を鞆負<small>ゆきえ</small>から号の雪江<small>せつこう</small>に改め併用する。 ○6月5日 池田屋の変。 ○7月19日 長州藩、京都乱入。(禁門の変) ○7月23日 第一次長州征伐。 ○8月 雪江上京して、長州征伐に関する惣督の件、幕府の作戦等につき幕閣から聴取し、また討手の諸藩と協議するなど奔走す。 ○9月21日 雪江、外交問題解決のため老中阿部正外に意見書を提出。 ○2月26日 雪江、春嶽を橘曙覧の庵(薬屋)へ案内す。 ○1月 雪江、幕閣の薩摩藩に対する疑念の説解並びに長州再征に代表される失政につき、慶喜や幕閣を諫止するなど盛んに活動する。 ○7月20日 将軍家茂没す。 ○8月20日 慶喜の宗家相続布告。 ○8月25日 孝明天皇崩御。
元治 元	一八六四	五八	
慶応 元	一八六五	五九	
	一八六六	六〇	

慶応	三一八六七	六一	○4月12日 春嶽、四侯会議出席のため上京。(第四回) ○5月4日 これより春嶽・山内容堂・伊達宗城・島津久光、時局解決のため数度会談。(四侯会議)
			○5月 雪江、幕府有司・薩摩・土佐藩士らと盛んに協議し、四侯会議後の政局打開のため奔走。○8月25日 雪江、御家老格隠居。○9月25日 雪江、議事掛に就任。○10月14日 慶喜、大政奉還を上表。○11月2日 春嶽、上京出立。(第五回) ○11月〜12月 王政復古及びその後の対策等について、雪江、幕閣・有司・土佐藩等と盛んに談合協議する。○12月9日 雪江、小御所会議に出席。○同日 王政復古の大号令。○12月12日 雪江、参与職拜命。
明治	元一八六八	六二	○12月21日 雪江、下阪し、慶喜の辞官・納地につき、老中板倉勝静らを説得。○1月3日 鳥羽伏見の戦。○同日 雪江、兵乱の回避説得のため大阪に出立、五日帰京。○1月6日 慶喜、大阪城を退去。以後、雪江は春嶽を助けて慶喜の恭順謝罪周旋のため奔走。○1月19日 雪江、内国事務掛に就任。○3月14日 「五箇条御誓文」発布。○4月1日 江戸城開城。○5月3日 雪江、徴士参与を免ぜられ、天顔を拝し御褒詞を受く。○5月〜7月 雪江、新政府の施政態度を是正すべく土佐藩士らと協議を重ねる。○8月6日 春嶽や雪江の新政府批判是正運動に嫌疑がかけられ、その責任を一身に引受けた雪江、福井に退去す。○8月27日 明治天皇即位。
			○2月24日 東京に遷都。
	二一八六九	六三	○5月 坂井港宿浦(三國町宿)へ閑居。○12月 「丁卯日記」・「戊辰日記」執筆完了。
	四一八七一	六五	
	六一八七三	六七	○7月11日 春嶽、宿浦の雪江宅を訪問。雪江宅に「松陰漁屋」と命名。雪江「奉答紀事」の執筆開始。

明治	九	七〇	◎10月 雪江「奉答紀事」執筆完了。
	一〇	七一	◎7月～9月 雪江、東京に滞在、春嶽邸の記録整理にあたる。 ◎9月28日 雪江、脚気症発病のため、東京岩佐病院に入院。 ◎10月3日 雪江没す。
	一八		◎10月11日 雪江の遺骸、東京品川海晏寺境内の松平家墓地に埋葬。
	一八		◎3月6日 特旨を以て、雪江、従四位追贈さる。
	八五		

百年祭記念 「中根雪江先生展」 出品目録

第一 中根雪江の生立と学問

中根雪江は、文化四年（一八〇七）七月三日、福井藩士中根孫右衛門衆譜の長男として福井に生れた。母は名を三木（幸とも称す）といひ、同藩士平本藤七郎の女であつた。雪江は、名を師質、初め栄太郎と称し、のち鞆負を通称とした。雪江・拘堂・拙舟などと号したが、この内「雪江」を最も愛用し、元治元年（一八六四）五月以降、通称も鞆負から雪江に改め、自他ともに専らこれを用いた。尚、「雪江」はセッコウと発音するのが正しい。

中根家は、代々三河国（愛知県）に居住した旧家で、福井藩には二代藩主忠直の時、孫右衛門貞経が召抱えられ、享保六年（一七二一）からは代々七百石を知行し、御側御用人となつて藩主に近侍し、藩政の枢機に關与するのが通例となつた。雪江も、大番頭・御用人御奏者番兼等の役職を歴したのち、弘化三年（一八四六）七月、十六代藩主慶永（春嶽）の御側御用人（初めは同見習）となり、主君の訓育や藩政の刷新、更には深く国事に関係した政治活動に奔走するなど、縦横の活躍を見せた。側御用人とは、藩主の側近にあつて、その日常に奉仕する小姓・近習番等で構成される側向役所の長官で、藩主を輔佐すると共に、その代理として家老達と政務を合議するなど、極めて重要な役職であつた。

雪江はまた、越前人の先陣をきつて国学者平田篤胤の門人となり（天保九年^{一八}三月^{一八}五月十日入門）、我国の古典の研究に没頭し、我国本来の精神を体得すべく努力した。雪江生涯の諸活動からは、絶えず、この国学研鑽によつて得た精神と、日本人としての自覚が感じとられ、国学が雪江の志操・行動に及ぼした影響の大きさを知らることが出来る。雪江の学問的感化力は、大

歌人橘曙覧を生み、佐々木千尋・粕谷沙庭・芳賀真咲（国文学者芳賀矢一博士実父）等、多数の平田篤胤門人を出現させた。更に雪江は、主君訓育の過程で、春嶽にも国学とその精神を教え、春嶽もまた、良くこれに応えて、深い国学上の素養を有するに至った。

- ① 中根氏系譜 中根雪江校訂 明治三十年八月写 一帖 東京 中根 隆氏蔵
- ② 福井二代藩主 松平忠直宛行状 中根家初代孫右衛門貞経宛 二通 福井市春嶽公記念文庫蔵
- ③ 松岡藩主 松平昌平(福井九代藩主)折紙状 中根家四代朝負衆逢宛 一通 〃
- ④ 宝永六年(1799) 松岡御家中之図 嘉永年間、山崎英常写 一面 本館蔵
- ⑤ 中根雪江筆 松岡天龍寺墓参の和歌 短冊 一点 福井市 岡本等氏蔵
- ⑥ 中根衆譜(雪江実父)写「柳宮監察秘鑑」 一冊 東京 中根 隆氏蔵
- ⑦ 「剥札」 福井藩士勤書 一冊 福井 松平立文蔵
- ⑧ 文化年中(1797-1800) 福井御城下之図 嘉永年間、山崎英常写 一面 本館蔵
- ⑨ 橘尚平筆 和歌幅 一幅 福井市春嶽公記念文庫蔵
- ⑩ 中根雪江写「玉銚百首」(本居宣長著) 一巻 東京 松平宗紀氏蔵
- ⑪ 「古事記」写本 中根雪江所持本 三冊 福井 松平立文蔵
- ⑫ 中根雪江筆 平田篤胤著書写本。(1)古史伝 五冊。(2)鬼神新論 二冊。(3)毀誉相半書 一冊。(4)天説弁々 二冊。(5)印度蔵志 二冊。() 十二冊 福井 松平立文蔵
- ⑬ 平田篤胤著書刊本 中根雪江所持本。(1)皇国度制考 二冊。(2)三五本国考 二冊。(3)神字日文伝 二冊。(4)霊の真柱 二冊。(5)古史成文 三冊。() 十一冊 福井市春嶽公記念文庫蔵
- ⑭ 中根雪江筆 「三五本国考」序文章稿。(富田厚積朱筆添削。) 一巻 福井市春嶽公記念文庫蔵

- ⑮ 橋曙覽筆 中根君に奉書紙を捧げまつる和歌 短冊 一点 東京 中根 隆氏蔵
- ⑯ 「中根大人芳吟艸」 中根雪江自筆歌集 二綴 〃 〃
- ⑰ 松平春嶽所用 神代文字印 二 願 福井市春嶽公記念文庫蔵
- ⑱ 平田篤胤著書刊本 松平春嶽所持本。(1)俗神道大意 四冊。
- (2)牛頭天王曆神弁 一冊。() 五冊 〃 〃
- ⑲ 「葛の葉」 荒尾清麗著 松平春嶽序。 一冊 福井県立図書館蔵
- ⑳ 国学者伝記集成 一冊 保管松平文庫蔵

第二 藩政への参画

天保九年(一八三八)、田安家より十一歳の新藩主松平春嶽を迎えた雪江は、幼少ながら英主の資質を秘めた、この主君を擁して、まず停滞困弊の藩政を改革すべく、大略、左のごとき活動を開始する。

(1) 幼君の訓育

雪江は、藩政刷新の根本を、英明な藩主による強力な親政の実現に求めた。そのため、鈴木主税・浅井八百里・石原甚十郎等の少壮気鋭の藩士達と協力して、幼い春嶽に稀にみる厳格な教育を施し、諫言を励行して、その言動を矯正することに努力した。この結果、春嶽は幕末史上有数の賢君に成長した。

(2) 財政の立直し

春嶽が十六代藩主に就任した頃、福井藩は九十万両余とも言った巨額の借財を抱え、極度の財政難に苦しんでいた。天保十二年(一八四一)、「勝手掛」に任命された雪江は、破綻に瀕した藩財政立直しに着手し、考えの及ぶ限り冗費を除去し、一藩に未曾有の節儉を令

し、五次にわたる大倭政を断行した。また、藩札相場の安定、三岡八郎（由利公正）を起用して「物産総会所」を設置する等、様々の施策を放って、財政好転に努力した。

(3) 諸学の振興

雪江は、誰よりも教育の重要性を認識し、一藩の学識向上に多大の力を用いた。橋本左内を起用して藩校の興隆をはかり、盛んに藩士の他国修行を奨励して、新たに展開された諸学術の吸収につとめ、殊に我国の西欧諸国に立おくれた部分を充実すべく、洋学の導入と発展に、非常な理解を示し、援助を惜しまなかった。

(4) 軍制改革

西欧列強の軍艦が、頻りに近海に出没し、武力を背景として開国を迫る時態に、雪江は深く国家の独立自存の必要を痛感し、兵備と軍制の近代化を強力に推進した。まず、藩の砲術師範西尾源太左衛門父子を江戸に派遣して洋式砲術を学ばせ、「御家流砲術」を創始制定し、蘭学者市川齊宮を召抱えて、洋式兵学の研究に当らせ、「御軍制御改正御用掛」に任じて、弓・槍隊を廃し、すべて鉄砲隊とするなどの大改革を断行した。

(5) 牛痘の普及

我国への牛痘種法導入のため、一身を抛って奔走努力した笠原白翁の最大の理解者であった雪江は、牛痘苗の輸入、藩内隅々までの種痘普及等、あらゆる分野で白翁を支援し、福井、ひいては全国の天然痘撲滅に貢献した。

②① 天保十年（一八三九）五月付「中根雪江建白書」写本 松平春

嶽（十二歳）宛

一通 福井市春嶽公

②② 弘化二年（一八四五）六月五日付「浅井八百里諫書」 松平春

嶽（十八歳）を諫めたもの。

一通 “

第三 国政への参画

嘉永初年以降、稀代の明君に成長した主君春嶽を擁して、雪江は深く国政に関係する重要問題解決のため、縦横の活躍を開始する。雪江の高邁な識見は多くの人望をあつめ、広く天下の諸有志と交流を深めたが、その周旋力と説得力とは、幕末維新の激動期に当って、徳川一家門筆頭たる福井藩の方向を誤らせず、諸雄藩の対立や策謀を調整・緩和するなど、大きな功績を残した。

(1) 將軍継嗣問題

松平春嶽や雪江は、嘉永末年より安政五年（一八五三〜五八頃）にかけて、英明・果斷の一橋慶喜を將軍世嗣に決定し、この人を中心に幕政を刷新強化し、諸外国の脅威に対抗し得る程に国力を充実させ、多難な時局を乗切ろうと考えた。雪江は、橋本左内と協力して春嶽を助け、その実現のために全精力を傾注し、血統論を楯に幼少の紀伊慶福を擁立しようとする井伊直弼等と激しく対立した。しかし、直弼が大老に就任して、紀伊慶福の將軍継嗣決定を強硬するに及んで、運動は失敗、挫折した。

(2) 春嶽の「政事総裁職」時代

文久二年（一八六二）、春嶽が政事総裁職に任ぜられるや、雪江は熊本から招聘した横井小楠と力を合わせ、主君年来の政治構想を実現すべく、寝食を惜んで活躍した。その結果、参覲交代制の緩和、幕府軍制・職制の改善、京都守護職の新設等、次々と弊政改革を断行することに成功した。殊に雪江は、主君と共に幕府の私政を廃することを説き、只管、朝意を遵奉して天下の公論に従う必要を強調した。

(3) 京都に於ける活躍

文久三年より明治元年（一八六三〜六八）にかけて、政局の中心が江戸から京都に移るや、雪江は、頻りに京・大阪に往来して時局收拾に奔走し、平和裡な政權移行の実現に努力

した。この時期、雪江は、幕権の維持に固執する幕臣や、過激な討幕論を主張する西国雄藩の間に立って、両論を調整し、諸侯・諸藩有志を包含した公議会体制を実現すべく努力した。また、その構想の根底では、早くより大政奉還の必要をも自覚していた。更に、慶応三年（一八六七）十二月には新政府の参与に任ぜられ、あく迄討幕を主張する薩長の策動を抑止し、戦乱回避のため身命を賭した。また、内国事務掛・外国人参内御用掛・租税掛等を命ぜられ、新政に参画した。

- ④② 中根雪江筆 「虎兇初生気食牛云々」の書幅 一 幅 東京佐々木賢一氏蔵
- ④③ 笠原白翁宛 中根雪江長歌並びに添書翰 安政五年（一八五八）正月付。 一 幅 福井市 原多文氏蔵
- ④④ 「三友遺墨」の幅（中根雪江宛 橋本左内・安島帯刀・茅根伊予之介書翰貼交。付、中根雪江筆添書。） 一 幅 福井市 春嶽公蔵
- ④⑤ 中根雪江宛 橋本左内書翰 安政五年（一八五八）三月二十四日付。 一 通 〃
- ④⑥ 橋本左内宛 長部部甚平書翰 安政五年八月二十九日付。 一 通 〃
- ④⑦ 橋本左内宛 村田氏寿書翰 安政五年十月九日付。 一 通 〃
- ④⑧ 中根雪江編述 「昨夢紀事」刊本 四 冊 〃
- ④⑨ 松平春嶽起草 中根雪江・橋本左内添削 徳川齊昭宛「時勢急務策」草案 安政五年五月二十一日付 一 綴 〃
- ⑤① 松平春嶽筆 訣別の手形並びに和歌の幅 安政六年（一八五九）十月十日、中根雪江拝領。 一 幅 東京 中根 隆氏蔵
- ⑤② 松平春嶽筆 「送別」の和歌短冊 安政六年十月十日、中根雪

- 江拝領。
- ⑤2 中根雪江筆 「おもひきや ふりし昔の云々」の和歌短冊。 一点 東京 中根 隆氏藏
- ⑤3 中根雪江著 「夢物語」 鈴木準道書写。 一点 東京 松平 家藏
- ⑤4 中根雪江筆 外交問題意見書草稿 一卷 福井 松平 立文 蔵
- ⑤5 中根雪江筆 「尚友書屋記」 二点 福井 市 春 文 庫 蔵
- ⑤6 中根雪江、徳川慶勝(尾張)より拝領の金蒔絵印籠 一 腰 〃 〃
- ⑤7 中根雪江宛 幕末諸士書翰貼交 小屏風 一 双 〃 〃
- ⑤8 「六賢遺墨」の幅 (木戸孝允・西郷隆盛・藤田東湖・小松帯刀・田宮如雲・小原如水の中根雪江宛書翰貼交。付、松平春嶽筆添書。) 一 幅 〃 〃
- ⑤9 中根雪江筆 「閑作水竹雲山云々」の扁額。 一 額 福井市 岡本等氏藏
- ⑥0 中根雪江編述 「再夢紀事」刊本。 一 冊 福井市 春 文 庫 蔵
- ⑥1 横井小楠銅版画像 一 葉 記念 文 庫 蔵
- ⑥2 横井小楠著 「学校問答書」写本 一 綴 本 市 春 文 庫 蔵
- ⑥3 中根雪江筆 長州征討に関する意見書草稿 一 卷 福井市 春 文 庫 蔵
- ⑥4 中根雪江筆 家茂將軍上洛上奏文章案 一 卷 〃 〃
- ⑥5 中根雪江所用 道中懐中用「京阪街道一覽」 一 卷 〃 〃
- ⑥6 中根雪江所用 短刀 銘「宗有作 元治元年(一八六四)冬至」(幕臣大久保忠寛より受贈。) 一 振 〃 〃
- ⑥7 中根雪江宛 大久保忠寛(一翁)書翰 年不詳正月四日付。 一 通 木 原 館 蔵
- ⑥8 中根雪江宛 諸士書翰卷軸 (藤田東湖・勝海舟・横井小楠・後藤象二郎等、八名の自筆書翰貼交。) 一 卷 東京 松平宗紀氏藏

- ⑥9 中根雪江肖像写真 (慶応元年一八五〇同二年) 三葉 福井市春嶽公藏
- ⑦0 中根雪江宛 「徴士参与職 内国事務局判事」辞令 (慶応四年一八五九二月、総裁有栖川宮。) 一通 東京 中根 隆氏藏
- ⑦1 中根雪江筆 「没走官途殆六句云々」の書幅 一幅 福井市土田耕司氏藏
- ⑦2 中根雪江筆 「風雲相会幾時休云々」の書幅 一幅 福井市岡本等氏藏
- ⑦3 天賜 牧童蒔絵印籠 (慶応四年五月三日、中根雪江拝領。) 一腰 福井市春嶽公藏
- ⑦4 中根雪江筆 「大御恵をかしこまりて」の和歌短冊 一点 福井市小島龍美氏藏
- ⑦5 中根雪江筆 「君か代はとがへりをまた云々」の和歌短冊 一点 東京 松平家藏

第四 宿 浦 閑 居

明治元年(一八六八)八月、参与を免ぜられて福井へ帰った雪江は、以後一切の公職から遠ざかって、悠々自適の生活を送り、明治四年五月には、三因港に程近い宿浦に隠居所を設けて閑居した。

これ以後、雪江は花鳥風月を友とし、生涯の趣味であった魚釣りに没頭するなど、世俗の喧嘩を避けて、明鏡止水の心境を持ち、明治十年(一八七七)十月、七十一歳で没するまで、決して名利を追求しなかった。

雪江は、幕末維新史の基礎史料として著名な「昨夢紀事」「再夢紀事」「丁卯日記」「戊辰日記」、及び「奉答紀事」を編述したが、これらは、いずれも松平春嶽の事績を中心とした史書であり、この内「丁卯日記」「戊辰日記」「奉答紀事」の三篇は、この閑居中に執筆されたものである。これら雪江の著述は、その公正綿密な筆致と、引用史料の豊富さによって、維新史研究上、不可欠の重要史料である。

雪江は、生涯を主君春嶽の輔翼ほよく（たすけること。補佐。）に捧げつくし、天下万民の意見が反映される政治体制の実現を目差したが、常に舞台裏にあって活動し、功名を求めて自ら表に出ることを好まなかった。

- ⑦⑥ 明治二年（一八六九）九月、中根雪江宛 太政官沙汰書（太政復古の際の功勞により、四百石下賜。） 二通 東京 中根 隆氏藏
- ⑦⑦ 松平春嶽筆 前提書添書 一通 東京 隆氏藏
- ⑦⑧ 明治三年四月二十五日付、中根雪江宛 松平春嶽・同茂昭沙汰書（維新の際の功勞により、百五十拾石領授。） 一通 東京 隆氏藏
- ⑦⑨ 中根雪江 蓑笠竹竿姿油彩肖像画 一点 東京 松平宗紀氏藏
- ⑧⑩ 富田鷗波賛 中根雪江 蓑笠竹竿姿肖像画幅 一点 東京 中根 隆氏藏
- ⑧⑪ 中根雪江所用 紫檀製矢立 島雪齊作 一点 東京 隆氏藏
- ⑧⑫ 伝中根雪江所用 桐製本箱 一点 東京 隆氏藏
- ⑧⑬ 中根雪江筆 「閑居水声」の和歌短冊 一点 福井市 原多文氏藏
- ⑧⑭ 中根雪江筆 「漁火のかげにさほひて云々」の和歌幅 一点 東京 佐々木賢一氏藏
- ⑧⑮ 中根雪江筆 「さしのぼる月の光に云々」の和歌幅 一点 丹波洞主宮崎伝氏藏
- ⑧⑯ 中根雪江筆 「太陽開曆」の扇面額 一点 福井市 原多文氏藏
- ⑧⑰ 中根雪江筆 画並びに賛の扇額 一点 丹波洞主宮崎伝氏藏
- ⑧⑱ 中根雪江筆 皇恩奉謝の詩並びに和歌 一点 福井市 原多文氏藏
- ⑧⑲ 中根雪江筆 「懼心不免亘三句云々」の書幅 一点 福井市 原多文氏藏
- ⑧⑳ 中根雪江筆 「有風有月来訪云々」の聯 一点 東京 中根 隆氏藏
- ⑨① 中根雪江筆 「虎鬪龍争夢一場云々」の書幅 一点 福井市 藤田幸雄氏藏

- ⑨2 中根雪江筆 招魂場（現、福井招魂社）奉納灯籠の慰霊歌拓本
 一点 本館蔵
 ⑨3 中根雪江筆 「したとめ草」（明治四年八月、六女千代に書き
 与えた嫁としての心得書。）
 一綴 東京 中根 隆氏蔵
 ⑨4 中根雪江筆 「彫庭曾自釋衣冠云々」の書幅
 一 幅 東京 佐々木賢一氏蔵
 ⑨5 中根雪江筆 「巻舒随手釣糸長云々」の書幅
 一 幅 福井市北川修正氏蔵
 ⑨6 中根雪江筆 「一片春帆風裡飛云々」の書幅
 一 幅 福井市 原多文氏蔵
 ⑨7 中根雪江筆 「漁獵快心老未忘云々」の書幅
 一 幅 三国町 藤田 久三郎氏蔵
 ⑨8 中根雪江筆 蘭の画並びに賛の幅
 一 幅 東京 中根 隆氏蔵
 ⑨9 中根雪江筆 「月影いく夜か深く云々」の和歌聯
 双 幅 三国町朝倉英夫氏蔵
 ⑩0 中根雪江筆 「山王宮御額奉納の記」（元治二年 一八
 六五 四月十
 五日、松平春嶽奉納の神額に添えた由緒書。）
 一 額 三国町 三国神社蔵
 ⑩1 中根雪江筆 「一」の舟額
 一 額 三国町 三国神社蔵
 ⑩2 中根雪江筆 「松陰日記」
 一綴 福井市 春日神社蔵
 ⑩3 中根雪江筆 「あらし山とひ来し老の云々」の和歌短冊
 一点 記念文庫蔵
 ⑩4 中根雪江筆 「昨夢紀事」「奉答紀事」献呈の添書（明治
 年、松平春嶽に両書を献呈した際のもの。）
 一 卷 東京 松平宗紀氏蔵
 ⑩5 中根雪江編述 「奉答紀事」
 三冊 福井県立図書館蔵
 ⑩6 中根雪江編述 「戊辰日記」刊本
 一冊 福井県立図書館蔵
 ⑩7 中根雪江編述 「丁卯日記」刊本
 一冊 〃
 ⑩8 中根雪江木彫座像 鬼斎作（無銘）
 一 軀 三国町 藤山 久三郎氏蔵
 ⑩9 松平春嶽筆 「身似浮雲心似水云々」の書幅（春嶽が明治十
 年、自らの心境を託して、雪江に贈ったもの。）
 一 幅 三国町伊藤柏翠氏蔵

- ⑩ 松平春嶽・中根雪江・毛受洪等、寄書の幅 一 幅 東京 中根 隆氏蔵
- ⑪ 松平春嶽筆 「越行日記第五号」(宿浦雪江宅、訪問の記事。) 一 綴 福井市春嶽公
記念文庫蔵
- ⑫ 松平春嶽筆 中根雪江諡号(生前の行を尊び、死後におくる
名)「堅岩松陰命」の書付。 一 点 東京 中根 隆氏蔵
- ⑬ 松平春嶽筆 中根雪江の死去を報知する回状 一 卷 東京 中根 隆氏蔵
- ⑭ 松平春嶽筆 弔歌の幅 (春嶽自ら雪江の靈前に手向けたもの。) 二 幅 本館 "
- ⑮ 松平春嶽筆 中根雪江墓碑銘状本 一 点 本館 "
- ⑯ 「松平家々務局日記」 明治十年(一八七七)十月の條。 一 綴 福井県立図書館蔵
保管松平文庫蔵

(会期中、本目録中の史資料の展示換えや、目録以外の史資料を
展示することもありますので、御了承下さい。)

中根家略系譜

平忠正 (十四代略)

平忠盛 弟
平清盛 叔父

初代 貞經

中根孫太郎のち孫右衛門
二代福井藩主忠直に仕える
寛永元年(一六四)卒か?

二代 好貞

中根孫右衛門
三代福井藩主忠昌に仕
えのち忠昌次男昌勝
松岡へ分封の節随従し
松岡藩家老となる。
延宝五年(一六七)六月卒

三代 衆冬

中根刑部左衛門
初め又六
元禄十年(一六七)
八月卒

四代 衆逢

中根親負初め藏人、式部
享保六年(一七三)松岡藩主
昌平(宗昌)福井本藩相
統に伴い福井に引越す。
享保十五年二月卒

五代 衆寛

中根親負初め數馬内藏介
明和二年(一七五)十月卒

渋谷 元連

渋谷権右衛門
寛永七年(一七〇)渋谷家相続す。
延享五年(一七四)九月卒

六代 衆美

中根内膳幼名市十郎
又小弥太
安永二年(一七三)七月卒

七代 衆久

中根親負初め辨之助 小弥太
浅井源左衛門政敏嫡子
寛政八年(一七六)二月卒

八代 衆諧

中根孫右衛門幼名左太郎 又六玄藩親負
文政十三年(一三)九月卒
室・三木 福井藩士 平本藤七郎の女
(中根雪江母)

九代 師質

中根親負初め衆太郎 雪江と号す。
文化四年(一八七)七月三日福井に生る。
明治十年十月三日東京にて卒
室・兎勢・荒川十右衛門直方女
継室・勢記・水谷織部勝房叔母
寿美・小沢甚平姉

十代 師建

中根牛介
明治三十二年十二月卒
(他に二男七女)

浅井 政敏

浅井源左衛門
享保十八年浅井源左衛門
政之の養子
文化元年(一四)十月卒

浅井 政辰

浅井辨左衛門初め權三郎
天保七年(一三六)八月卒

浅井 政良

浅井新六初め辨之助
中根親負衆久男
浅井辨左衛門政辰の
養子
文政四年(一三十一)
月家督以前卒

浅井 政昭

浅井八百里
嘉永二年(一八)一
十一月卒

平本 良載

平本平学
平本藤七郎良高の養子

荒川 直謨

荒川外巻
荒川十右衛門直方の養子

幕末維新の激動期
福井藩の進路を正しく導いた功臣

福井市立郷土歴史博物館
協賛 中根雪江先生百年祭事業会
昭和52年9月30日発行